

教を信じ遂に有名な佛教禁止令を出して道教の爲に一大發展時期を作り、また支那の制度をその國に移し入れるといふやうな方針をとつて、著しく支那文明の色づけをした譯であります、それについては五世紀の後半時代に有名な孝文帝と云ふのが出まして、當時なほ存してゐた自分の國風の殺伐野卑なるを厭ふて、その國語を用ゐるその衣服を纏ひ辮髪するのを禁じたのを始め、總て國俗を改めて、その代りに支那文明の眞似をすることに全力を擧げた。從來鮮卑の國姓は拓跋と申しましたのを支那風に改めて元氏と稱し、婚姻を支那人との間に通じ、學校を作つて漢字の教育をし、役人を探るのに試験の制度により、その試験には漢學の試験をする、天子自らも漢學を修め文章を作ると云ふやうな風に甚だ積極的に支那文化を取入れたものである、一々詳細にその有様を申上げる違はないが、要するに魏では支那の文明を取入れてすつかり支那化してしまつたのである。

次の契丹即ち今日の遼河の上流から出た遼は支那に於て領して居つた土地が僅かに今日の北平地方から山西の一部分にかけての僅かの土地でありまして、大して深く支那に入つてゐない、無論一時河南に入り込んだことがありますが、それは失敗して引揚げてしまつたと云ふやうな關係から支那本土に於て持つて居つた土地は僅かである、随つて漢文明を攝取しこれに同化されたと云ふことは著しくなかつたらうと思はれるかも知れないが事實は必ずしも左様ではない、契丹の第二代の天子太宗の時に河南に侵入して五代の晋を滅し、都の開封を陥れた、その時に開封府内の記録を始め、從來傳つて居たところの文化的の財物や教養ある人々をも捕へて北の方に歸り、これから大に遼の國に支那文明が行はれることになつた。それでその儀式制度の如きも支那に倣ひ官吏を試験して採ると云ふやうなことも矢張り遼の國に行はれることになり、その科目を調べて見ましても、矢張り漢學を以て試験して